

はしがき

”生命の实相哲学”の説く中心真理はなんであるかという、現象界は唯心所現であるから、心に従って自由自在に貧でも富でも病でも健康でも不幸でも幸福でも現わすことができるということである。これを”横の真理”という。それからこの哲学の”縦の真理”は、人間は本来、神の最高の自己顕現であり、如来であり、無限の生命、無限の知恵、無限の愛、その他すべての善徳に充ち満ちた久遠不滅の存在である——これがわれわれの真相であるということである。この”縦の真理”と”横の真理”とを縦横に駆使して人生を支配しうる生活が本当の宗教生活であるのである。

宗教というものを死後の生活のためのものだと考えるのはまちがいである。宗教は生命の不滅を教えるものであるから、死後にも生命が存続する限りにおいて死後の救いをも説くけれども、今生きている生命の救いが成就しないような宗教で、死後も存続する生活の救いが成就することは不可能であるのである。生長の家の教えがすぐれているのは、宗教的真理を実生活に応用して、その真理を悟れる人々の身边に、今ここに、天国浄土が実現するからである。

今ここに天国浄土を実現する道は仏教でもキリスト教

でも説かれているが、それがたいい忘れられているのである。本書の151頁に小木虎次郎博士とわたしとの問答がある。「趙州和尚が僧堂にいと弟子が道を聴きに入って来た。趙州和尚は”何を担いで来たか。その担いでいるものを放して来い」と叱りつけたという話がある。無だ、無だ”と言って”無”を担いでいる人がある。無というもの”だと思ふから”無”を担ぎなくなる。無”とは”なんにも無いことじゃ”とわかつたらもう担がなくなる。裸になつてすべてを捨ててこい”と言つたら、着物を脱いで来ることだと思つて身体を真つ裸にして出て来るようなことでは、”まだ何か股間に提げて来ているぞ”と言われてまごつくようなことになる」と小木博士が言っている。この何ものをも擱まなくなり、露堂々と生命の实相の完全さが露呈するようになったとき、その人の生命は自由自在となつて病氣も貧乏も家庭苦もいつさいの生活上の問題が解決するのである。

宗教生活はいつさいの否定をとおして、”無”さえも否定しきつて、その奥にある生命の实相の大自然を發揮する生活である。死んでから宗教の救いはじまるのではなく、生きている今本当の宗教生活があるのである。キリストも「死にたる者に死にたる者を葬らせよ」と教えている。読者が本書を読むことを契機として真に大自然の生活に到達せられんことを希望してやまない。